

是彼會員

栗島でタコ捕り

中川啓造（会員）



「きゃーくそがわりー、2日かけてタコが1匹も捕れなくて。」「きゃーくそがわりー」という言葉は、岡山弁で胸くそが悪い、気分が悪いという意味です。栗島という島をご存知ない方も多いので解説しておきますが、この島を知っている方は余程地理に詳しい方か、新潟県出身の方だと思えます。

ネットで調べると、全国にこの名前はいくつもあるようですが、主なものは瀬戸内海にある栗島とここ日本海に浮かぶこの栗島です。

新潟の栗島は、佐渡島の右上に位置し、面積が10㎢弱、島の周囲が23km、人口は2018年10月1日現在で364人です。僕がこの島を知ったキッカケは、ほぼ毎朝聴いている朝5時

から始まるNHKラジオ「マイ朝ラジオ」の前番組「早起き鳥」で紹介された新潟在住の方のレポートでした。

放送されたその具体的な内容は忘れましたが、触発された離島好きの僕は1度行ってみようという気が起きました。

40数年前に行った輪島沖に浮かぶ舩倉島から始まり、佐渡島、飛島、北海道の利尻島、礼文島、伊豆大島、八丈島、式根島、新島、小笠原父島、瀬戸内海の豊島、日振島、戸島、そして以前「善隣」2017年6月号に掲載されたインドネシアのカリマンジャワ島、済州島、台湾の金門島、蘭島、緑島、澎湖島、タイのラン島、マレーシアのパナイン島、フィジー諸島、トンガのトンガタブ島、ギリシャのサ

ントリーニ島、ミコノス島、イランのゲシム島、さらに最近足を運んだ鹿児島島の硫黄島、石島と続きます。

さて、初めての栗島行きは、夜行バスで新潟駅に早朝着き、そこから羽越本線で村上駅で下車して、村指定の乗合タクシーに乗り15分で岩船港に着きます。ここから高速船またはフェリーに乗船して1時間前後で栗島の港に着きます。

閑話休題。

この島に初めて足を運んだのは、8年ほど前で何の目的もなかったただボートと2泊3日過ごしましたが、その折島起こしとしてこんなものがあるよ、と紹介されたのが「磯タコ捕りツアー」でした。

このツアーは、栗島旅館組合

が主催するもので毎年9月の週末、3回にわたって行われる、定員100名の1泊2日の冒険の旅です。具体的には、1泊2日の宿泊代（食事付き）とタコ捕り大会の参加費用、保険代などがセットになっており、大会時には宿の主人自らがインストラクターとして付き添い、タコの捕り方を教えてくださる、という趣向でした。制限時間は2時間で、タコの重量を競って3位までは表彰されるこのことです。そしてその後「ワッパ煮」という栗島独特の調理法、食材を入れたワッパという木の器に焼いた石をぶち込んで食べる食事が提供されます。タコ捕りに使うのは、2本の長い竹の棒で、1本にはエサとなるカニ、貝をつけ、もう1本の棒にはタコの頭を引っ掛けるハリがついています。

その年は残念ながら定員に達していたので参加できず、翌年知り合いと参加しました。

収穫は残念ながら両者ともゼロ、腕がないのか、場所が悪かつ

たのか分かりませんが……。

そこでこのままでは面白くないので月を改めて1人で粟島に来て挑戦しました。

そうすると、2泊3日で何と8匹の成果、そこですっかりはまりました。

それからは毎年、10月から11月にかけて日を選び2泊3日の日程でわざわざ粟島へタコ捕りに出かけて来ました。長靴を用意して常宿にしている旅館に預け、毎年そこを基地にしてそれのみを目的にしてわざわざ足を運びました。

島では漁業権という名目のため必ず1回は宿の方がインスタラクターとして付いて指導してくれましたが、それさえも必要がないほど捕れ、毎回10匹前後、多い時には20匹の成果もあり、入れて帰る保冷箱の収納に苦労したこともありました。

タコは驚くほど視力が良く、経験上10mぐらい先からも獲物を見つけることができるようなので、エサの付いたサオを動かすと結構食い付いてきます。

それにも関係したことなのですが、エサのついたサオを動かすときは、タコの隠れている岩場のすぐそばではなく、少し離れた所で動かして誘き出すのがコツだそうです。

捕ったタコは、急所、目と目との間を石で叩くかもしくは岩に思い切りぶつけて弱らせ、腰に下げた網の中に入れます。

現在はそれも面倒くさくなり、たてしま旅館のご主人に教わった短く尖った竹の棒で目と目の間を突き刺し、つながったタコ糸につるし腰にぶら下げています。ただ時々その瞬間タコと目が合い、気のせいか恨めしそうな眼をされると、「ごめん、成仏しろよ」と言ってお経を唱えながら行います。明治の初めに廃仏毀釈によって寺を潰された坊主の子孫は、その時だけ殺生を行っておりです。

タコ捕りは魚釣りと違って1か所に留まらず、場所を移動しながら捕えます。苔の張った岩の上も結構歩き回り、滑るので危ないこともそこそこあります。

それでも毎年粟島へタコ捕りに出かける理由は、エサのついたサオがグッと重くなる独特の手ごたえに大興奮する時間に尽きるか、と思います。

僕は魚釣りはやりませんが、釣り人も同じ感覚だと思います。そして、より潜在的意識として小さい頃岡山の片田舎の川での魚とり体験が根底にあるのではないか、と思われまます。

今回は、3日目、宿の方がインスタラクターとして付き添ってくれてから何とか成果が上がりましたが、それでも自身は午前1匹、午後1匹のやつと2匹でした。

今年是不漁でしたが、次の年もまた粟島へタコ捕りに出かけると思います。

現在の宿は、「たてしま」と



旅館「たてしま」のご主人

いう旅館ですが、何とそのご主人、五十嵐道行さんが旅館組合長をなさっていた当時、粟島観光の目玉として「磯タコ捕りツアー」を発案し、2000年から始めたところ、年々人気を呼び、今年2019年が節目の20回目の記念の大会になるそうです。

彼からはタコを捕える方法として、エサに食い付いたタコをハリではなく軍手をはめた手で直接つかむ方法を教わり実践しています。このやり方はハリを使うよりも効率が良く、ほぼ100%逃げられません。

ここ「たてしま」さんはタイのウロコの油揚げ、カワハギの白子焼きなど普通の旅館では味わえない創作料理を手がけられ、それも楽しみの一つとして粟島へ毎年通っています。

終わりに粟島は特にこれといったものはありませんが、手付かずの自然と素朴な人情にあふれた魅力一杯の島なので、是非一度足を運ばれることをおすすめします。

(合掌)